未来に向けて

JAXA 宇宙飛行士　星出 彰彦

2012 年、約 4 ヶ月間の国際宇宙ステーション長期滞在を終え、無事地球に帰還することができた。2008 年に実施した、国際宇宙ステーションに日本の「きぼう」船内実験室を取り付ける約 2 週間のミッションに続き、私にとって 2 回目の宇宙飛行であった。今回は、無重力などの環境を利用した各種実験や日本の「こうのとり」を含む各国の無人宇宙補給機の捕獲など関連の作業、当初の計画を超える 3 回の船外活動など、盛り沢山の内容となった。実験としては、小型の人工衛星を国際宇宙ステーションから放出する世界初の実験や、メダカを使った無重力での骨密度や筋力への影響を調べる実験などを含め、約 40 の実験作業に携わった。

国際宇宙ステーション滞在中は、米露の宇宙飛行士とともに 6 人で生活し、打ち上げまでの 2 年半にわたり世界各地で受講した訓練で身につけた知識や技能を発揮し、日本のつくばを始め、アメリカ・ロシア・ヨーロッパで 24 時間体制で活動する管制チームと協力して作業にあたった。健康をベースに体力や知識、考える力をつけ、安全・確実にミッションを実行することができた。

振り返れば中学・高校時代は水泳で体を鍛え、また慶應義塾大学理工学部時代は理工学部体育会ラグビー部に在籍し 4 年間活動したことで、勉強と並行して体力や、厳しい状態にあっても進む精神力を身につけることができたように思う。また、ラグビーという、それぞれの役割を全うしつつ互いにカバーしあいながら勝利を目指すチームスポーツを通じ、国際宇宙ステーション計画という 15 ヶ国が参加する巨大な国際チームで活動する上で必要不可欠なチームワークを培うことができた。そして何よりも、卒業から 20 年以上たった今も応援してくれるかけがえのない仲間と出会うことができた。

宇宙開発というと、とかく最先端の技術というイメージを抱くかもしれない。しかし、根っこを支えるのは、設計者、技術者、作業者、運用管制官、訓練インストラクター、医師、法律家、研究者、そして宇宙飛行士など、宇宙に情熱を傾ける世界中の人たちのたゆまぬ努力であり、ミッションを成功に導くのに不可欠なのはその絆である。理工学部 75 年の伝統を糧に、未来を担う学生の皆さんには、勉学に励むと同時に体と精神を鍛え、多くの仲間を作り、学生時代を謳歌し、将来世界に貢献できる人間になってくれることを期待している。